

Course N@viを使った「相互採点」、 「わせポチ」のチャット活用など、 独自の方法でICTツールを生かす

教員は、学生に大学ならではのクオリティの高い教育を十分に提供する一方、自身の研究活動にも力を注ぐ必要がある。栗崎周平准教授は、2つを両立するためにはICTツールが有効だと話す。Course N@viを使ったレポートの「相互採点」や「わせポチ」の意外な使い方など、両立のためのさまざまな工夫について話を聞いた。



栗崎 周平
政治経済学術院 准教授

学生によるレポートの相互採点で 授業以外の「学びの機会」を増やす

ICT機器を活用して授業を工夫することは、学生の教育効果を上げるという狙いだけでなく、実は教員にとってのメリットが大きいと栗崎准教授。その背景には、研究者である以上、教員は研究活動に力を注ぐべきだという考えがある。「我々が研究者として一流を目指していなければ、学生にも一流を目指せとは言えないと思うからです。そのためには、授業の負担を軽減して研究の時間を確保したい、その思いがICT機器の活用につながっています」。

工夫のひとつが、学生が書いたレポートを学生同士で評価し合う「相互採点」という仕組みだ。「国際政治学」は履修人数が250名と多いため、レポートを採点するのも簡単ではない。しかし、学生同士に採点させることで、教員の採点負担を減らしつつ、学生は通常の授業以外での学びの機会を得ることができるという。

「相互採点は、前任校であるテキサスA&M大学時代にその存在を知りました。日本でオンライン大学講座『JMOOC』の講座を持ったときに初めて実際にやってみて、早稲田大学でも取り入れました」

「国際政治学」のクラスでは、この相互採点を行うレポートを全部で5回課している。そのうちの4回は「相互採点エッセイ」で、指定されたオンデマンド講義を視聴して、その内容について論述する。また残り1回の「政策分析エッセイ」では、既存の時事評論の中から一遍を選び、授業で学んだ理論モデルや実証的な知見を用いて再分析を行う。文字数はいずれも800～1000文字程度としている。

この「相互採点」の特徴は、レポートを書いただけでは点数がまったくもらえないところにある。学生は自分で書くだけでなく、必ずほかの2人の学生のレポートを採点しなくてはならない。学生たちは、栗崎准教授が作成した「ループリックス」という採点基準の解説を見ながら採点していくという。

「ただ、採点基準を見てもよくわからないケースもあるので、採点の際にはほとんどの学生がもう一度オンデマンド講義を見直しています。また、授業のスライドもCourse N@viにアップしていますが、こちらも参考に見ている学生が多いようです」。他人の採点をすることで責任感が生まれ、オンデマンド講義とスライドを何度も見ながら、自然に一生懸命勉強していくことになるのだ。

採点用紙にはコメントを書き込む欄もあり、特に低い点数をつける場合は、コメントを必ずつけなければならない。自分のレポートを書いて、2名分の採点を行い、コメントも書く。学生にとっては大変だが、相互採点のレポートは毎回90%以上の提出率で、通常のレポートより提出率が高くなっている。

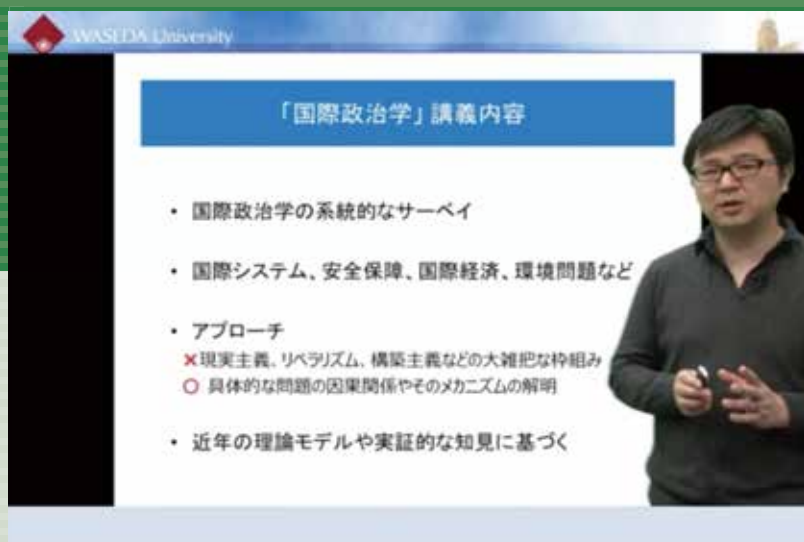
Course N@viをフル活用して 「相互採点」の仕組みを実現

さて、この「相互採点」のレポートでは、Course N@viをフル活用している。まず、エッセイを書くために視聴するオンデマンド講義をCourse N@viにアップ。このオンライン講義は、2014年に「JMOOC」用に収録したものを使用している。学生は、講義を視聴後、Wordでエッセイを作成してCourse N@viから提出。その後、栗崎准教授がTAと共に「採点者割当表」を作り、Course N@viにアップする。学生は割当表に従って、採点対象の学生のエッセイをCourse N@viからダウンロードして、2人分の採点を行う。もちろん、採点とコメントを入力した採点結果も、期限内にCourse N@viにアップして提出する。さらに、「JMOOC」で相互採点をする際に作ったという解説動画もCourse N@viにアップ。「相互採点はまだ日本では一般的ではないので、解説動画があることで少し安心感につながっていると思います」。

ちなみに、学生が採点しているという、そのクオリティに不安を感じる人もいられるかもしれない。しかし、栗崎准教授によると、学生が採点したものと自身の採点を比較すると、かなりの部分で一致しているという。

オンデマンド講義を利用して行う 反転授業の活性化が今後の課題

オンデマンド講義について、「相互採点エッセイ」のためだけでなく、もっと利用の機会を増やしていきたいという栗崎准教授。その一つとして、対面の授業の代わりにオンデマンド講義を充てていくことを挙げる。その背景にあるのは、学会などとの両立だ。春学期の場合、5～7月は欧米の大学が夏休みに入って、学会や研究活動



「国際政治学」講義内容

- ・ 国際政治学の系統的なサーベイ
- ・ 国際システム、安全保障、国際経済、環境問題など
- ・ アプローチ
 - × 現実主義、リベラリズム、構築主義などの大雑把な枠組み
 - 具体的な問題の因果関係やそのメカニズムの解明
- ・ 近年の理論モデルや実証的な知見に基づく

などが増えるからだ。研究者としては学会に出席する機会は確保したいが、授業は休講にたくない。そのための方策として、オンデマンド講義を活用したいと考えている。

「時事的な内容を扱う応用レベルのクラスでは難しいと思いますが、この授業では国際政治学の基礎的な内容を扱っているのだから、教える内容は毎年それほど変わらない。事前に準備したオンデマンド講義でも対応は十分可能だと考えています」

もう一つ、栗崎准教授が積極的に進めていきたいとしているのが、オンデマンド講義を使った反転授業だ。こちらは、すでに実践中だが、現状ではまだ課題があるという。

「オンデマンド講義を用意している回は、教場ではいわゆる授業は行いません。代わりに、Course N@viで視聴してきたオンデマンド講義の内容を、現時点の国際情勢に当てはめて、それについてみんなで議論をしています。学生には、『授業はしないけれど、興味のある人は来てください』と呼びかけていますが、反転授業の回は50人前後しか出席しないことが多いですね」

栗崎准教授の授業では普段から出席を取らない。学生がそれぞれの手段で勉強することが重要と考えているためだ。また、現状は、ディスカッションの構成や進め方なども試行錯誤の段階だという。

「出席以外にどのようなインセンティブがあれば、学生がオンデマンド講義の後の反転授業についてやる気を出すのか、これから検討していきたいですね。また、現在オンデマンド講義→反転授業の流れをうまく進めている先生の例があれば、そちらもぜひ参考にしたいと考えています」

「わせポチ」を授業時間中に開放、アクティブラーニングにつなげる

栗崎准教授が授業に活用しているICTツールには、ウェブ版クリッカーである「わせポチ」もある。「わせポチ」の使い方として一般的なのは、教員が学生に何らかの問いを投げかけて、それに対して学生が与えられた選択肢か自由記述で答えるというものだろう。栗崎准教授も、そういった使い方をしないわけではない。「たとえば、安保法制がニュースになったときには、賛成の人は1、反対は2、わからない人は3を押してください、といった質問をします時事ニュー

スに関連する質問をすると教室は盛り上がりますね」。

ただ、普段の「わせポチ」の使い方はそれとは異なる。「国際政治学」の授業を行う教室には2つの独立したプロジェクターがあるが、栗崎准教授は一方に授業のスライドを映し、もう一方を「わせポチ」用に授業時間中、ずっと開放している。

「『わせポチ』の自由記述の機能を使って、気になることがあれば何でも書き込んでいいということにしています」

たとえば、質問のある学生がいたらそれを『わせポチ』に書き込む。プロジェクターに質問が表示されると、教室の前方にいるTAが栗崎准教授に「質問が出ています」と知らせるという。授業中に「質問があります」と声を出して尋ねるのはなかなか勇気がいる行動だが、この方法ならいつでも気軽に質問ができるという。また、栗崎准教授のほうから「この略語の正式名称がわかる人は教えて」などと尋ねることもある。「そうすると、スマホやPCでネット検索して、誰かが『わせポチ』で正しい名称を入力してくれます」。

さらに、『わせポチ』を使って学生同士で議論が展開されていることもあるという。「私が特にテーマを出したわけではなく、勝手に議論をしている(笑)。一種のチャット状態ですね。盛り上がっているとこちらも授業の手を止めて、画面上で展開する議論について話すといったことが今まで何回かありました」。

もちろん、ときには授業にまったく関係のない話を書き込む学生もいるそうだが、栗崎准教授はそれを『わせポチ』の活用で生じる「コスト」と割り切る。「目に余る場合は注意しますが、多少そういう発言があったとしても、真剣な議論が出てくることのほうを評価します。『わせポチ』の一番の眼目はアクティブラーニングが生まれることだと考えています」。

ICT機器を活用した授業の工夫は、最初の準備が大変だと栗崎准教授。「ただ、うまく回り出すと教員の負担が減るし、学生も積極的になって学習効果も上がる。学生からも『大学ではこういう学びがしたかった』という声も多い。私自身、授業をやっているのが楽しいです。大学側の協力も得ながら、やってみる価値はあるのではないのでしょうか」。